

Der Kreisdenker Jakob Böhme

Yasuo OKAMURA

Jakob Böhme ist „Kreisdenker, der einen zirkulären Prozeß schildert, dessen Elemente sich gegenseitig durchdringen“ (Victor Weiss). Sein Denken geht nicht gradlinig, sondern spiralig. In der Spirale sich dieselben Gedanken wiederholen und in den Wiederholungen dringen wir immer tiefer in „die Tiefe der Gottheit“ ein, aus der schöpfen sich Gott, Welt und Mensch.

Für „die Tiefe der Gottheit“ fand Böhme später den Begriff des „Ungroundes“, der nichts und alles ist. Dessen „Urstand“ ist zuerst in der *Aurora* als die ursprünglichsten Beziehungen der göttlichen Kräfte ausgedrückt, die „sieben Qualitäten“ genannt werden. Diese Qualitäten sind alle „gleich=ewig“. Eine gebiert die andere und keine ist die erste und letzte. In dem zirkulären Durcheinanderdringen derjenigen Qualitäten wird der ganze Gott geschildert. Böhme gebraucht immer wieder das Symbol des Rades, das eine Ganzheit des Gottes ausdrückt und gerade den oben genannten „Urstand“ zeigt. Und das Symbol geht überhaupt auf das „ein drehend Rad“ des Ezechiels zurück.

ヤーコプ・ペーメの初期思想

岡村 康夫

序

ヤーコプ・ペーメの作品は、1612年に書かれた『黎明 (AURORA, oder Morgenröte im Aufgang, 1612)』以外は、すべて彼の晩年の数年間、すなわち1619年から1624年に集中している⁽¹⁾。そのような短期間に成立したという事情からか、その叙述内容には重複するところが多い。ただし、それは単なる重複ではない。同じ主題をめぐり、強靱にあるいは執拗に思索が重ねられている。それはいわば螺旋的・重層的構造をもつものと言える⁽²⁾。そして、その螺旋的・重層的展開のなかで、彼の思索の基本的諸概念が形成されていく。ここで言うペーメの初期思想とは、その基本的諸概念を中心に固められていく彼の思想の基底部を成す思想のことである。またここではそういう意味での彼の初期思想の現われた作品として、『黎明』とそれに続く三つの作品すなわち『三つの原理について (DE TRIBUS PRINCIPIIS, oder Beschreibung der Drey Principien Göttliches Wesens, 1619)』、『人間の三重の生について (DE TRIPLICI VITA HOMINIS, oder Hohe und tiefe Gründe vom Dreyfachen Leben des Menschen, 1619/20)』、『魂についての四十の問い (PSYCHOLOGIA VE-RA, oder Vierzig Fragen von Seelen, 1620)』を取り上げたい⁽³⁾。これらの初期の作品のなかで論じられ提出される諸問題は、これ以降の諸作品のなかでさらに深化熟成される。したがって拙論では、まずペーメの思索の中心をなす基本的諸概念を取り出し、それらを中心に展開される諸問題について論述したい。

【註】

- (1) ハンス・グルンスキーはペーメの著作を、 α 九冊の主要著作(一冊の初期の作品と八冊の主な創作期の作品、これがペーメの全著作のほぼ四分の三を占める)、 β 十一冊の理論的小冊子(そのうちの三冊は神学的小冊子 $\beta\beta$ である)、 γ 十一冊の実践的小冊子(そのうちの三冊は教化的小冊子 $\gamma\gamma$ である)、 δ 八冊の論争・弁明の書(これはほぼ全体の八分の一であり、そのうちの二冊は個人的弁明の書 $\delta\delta$ である)に整理し、

またその主な創作期に四つの波があったと想定し、それぞれの著述年代を次のように確定している。(Jacob Böhme von Hans Grunsky. 2. Aufl. Stuttgart : frommann-holzboog, 1984.S.308~313)

A. 初期作品

1. α 『黎明』1612年1月初めから聖霊降臨祭まで。前書き、1612/13年あるいは1616年か。補遺、1618/19年頃。

B. 主な創作期

第一波

2. α 『三つの原理について』1619年1月初めから10月半ば。
- 2 『人間の三重の生について』、『三つの原理』の補遺。1619年11月半ば頃。
3. α 『人間の三重の生について』1619/20年冬。
4. α 『魂についての四十の問い』1620年春。
5. β 『汎智学の神秘』1620年5月8日。
6. β 『神秘学の六つのポイント、ないしその短い説明』。
7. α 『キリスト人となる』1620年夏。
8. δ 『パウル・カウムへの最初の手紙』1620年8月14日。
- 4 a 『哲学的球あるいは永遠の奇跡の眼』1620年9月2日。
- 4 b 『翻された眼』。
9. α 『神智学の六つのポイント』1620年秋。
10. δ 『パウル・カウムへの第二の手紙』1620年11月19日。

第二波

- 13.と14.との間に、第一回シレジア旅行。1621年4月末から6月。
- 16.と17.との間に、第二回シレジア旅行。1622年5月初め。
11. δ 『ティルケに対する最初の弁明書』1621年初め。
12. γ 『常に悲しめる心を慰める書』1621年3月。
13. δ 『シュテューフェルに対する最初の書』1621年4月18日。
14. δ 『ティルケに対する第二の弁明書』1621年7月3日。
15. α 『諸物の印』1622年2月。
16. δ 『シュテューフェルに対する第二の書』1622年4月6日。
17. γ 『真の放下について』1622年5月。
18. $\gamma\gamma$ 『真の懺悔について』1622年6月1日。
19. γ 『新たな再生について』1622年6月24日。
20. γ 『超感性的な生について』1622年夏。

第三波

22.と23.との間に、第三回シレジア旅行。1622年のクリスマスの季節。25bのうちに第四回シレジア旅行。1623年4月20日出発。

21. γ『われわれ自身のうちの反キリストの殺害』1622年11月1日。
- 25 a 『大いなる神秘』の最初の半分(41章まで?)。1622年9月から12月半ば。
22. β『神的直観について』1622年12月半ば。
23. α『恩寵の選び』1623年初めより2月8日。
24. γγ『懺悔についての第二の小冊子』1623年2月9日。
- 25 b 『大いなる神秘』の第二の半分。1623年春および夏。
25. α『大いなる神秘』1623年9月。
- 25 c 『大いなる神秘』への補遺。

第四波

31.と32.および33.の一部は、第五回シレジア旅行中(1624年2月13日から3月25日)に書かれた。

39.は第六回シレジア旅行中(1624年秋)に書かれた。

26. γ『キリストとは』1623年11月。
27. β『真実の光と虚偽の光』1623年11月11日。
28. ββ『キリストの聖約Ⅰ』1623年11月。
29. ββ『キリストの聖約Ⅱ』1623年12月。
30. 未発表『三つの原理の表』第二稿。1623年12月27日。
31. β『三つの原理の表』第三稿。1624年2月。
32. γ『飢渴せる魂へ』1624年3月。
33. β『鍵』1624年3月4日。
34. γ『三つの誘惑について』1624年3月31日。
35. δδ『ゲルリッツ参与への書面による申し開き』1624年4月3日。
36. δδ『グレゴリウム・リヒターに対する弁明』1624年4月10日。
37. ββ『キリストの聖約』第二稿。1624年4月以前に着手。
38. γγ『小祈禱書』ドレスデンで1624年5月あるいは6月に着手。
39. β『神的啓示の観察』1624年秋。

以下、ペーメの作品についての年代確定は、以上のハンス・グルンスキーの整理にしたがいたい。

- (2) ヴィクトル・ヴァイスは『ヤーコブ・ペーメの霊的認識』(*Die Gnosis Jakob Böhmes*, Victor Weiss, Zürich, 1955, Origo Verlag, S.20)において、ペーメ

の特徴ある書き方に注目している。彼はベーメの叙述には「繰り返し(Wiederholung)」が多いことを指摘し、そこには読者をよりいっそう「深い意味と根拠」へと導くベーメのはっきりとした意図があると述べている。ヴァイスは、その「螺旋状の進行過程(Spirale)」のなかで同じ思想が繰り返され、遂には「神の認識」が達せられると言っている。

- (3) アレクサンドル・コイレの『ヤーコブ・ベーメの哲学』(*La Philosophie de Jacob Boehme*, Alexandre Koyré, New York, 1968, BURT FRANKLIN, Originally Published PARIS, 1929) は綿密なベーメ研究書である。この研究書は四部構成になっており、最初(I)にベーメの人と境遇を取り扱ったのち、『黎明』(II)とここで取り上げる三つの作品について言及し(III)、最後に(IV)主題別に、神、神的自然、創造、人間について論じるという形になっている。コイレのこの作品は、ベーメの思想展開を探る手がかりについて大きな示唆を与えてくれる。例えばロバート・ブラウンの『シェリングの後期哲学～1809から1815の作品へのベーメの影響』(*The Later Philosophy of Schelling. The Influence of Boehme on the Works of 1809-1815*, Robert F. Brown, Lewisburg, 1977, Bucknell University Press) 参照。

第一章 「黎明」

アブラハム・フォン・フランケンベルクによると、ヤーコブ・ベーメは1575年にゲルリッツ南方ほぼ1.5マイルにあるアルト＝ザイデンベルク村で、父ヤコブ、母ウルズラとのあいだに生まれた。子供の頃は家畜の番などをしていましたが、読み書きを覚える程度の学業を終えるとすぐに靴屋の徒弟奉公へ出された。そして、その修業の旅の途上「神の光」に包まれる最高の喜び溢れる体験をした。それは七日の間続いたと言う。その後、ゲルリッツで1594年にハンス・クンシュマンの娘カタリーナと結婚し、親方となった。こうして一人前の職人として靴屋稼業に励んでいたある日、彼は再び「神の光」に捉えられた。彼の魂は、錫製の器の輝きを通して、「秘められた自然の最内奥の根底、あるいはその中心(*der innerste Grund oder Centrum der geheimen Natur*)」へと入っていった。それは1600年、彼が25歳の時であった。しかしその体験はすぐには日の目を見なかった。12年の歳月の後、その間に書き留められた彼の最初の書は、さる高名な貴族の目に止まり、書写され、人の知るところとなった。それが「立ち昇る曙光(*Morgenröthe im Aufgang*)」であり、これはのちにバル

タザール・ヴァルター博士によって『黎明(AURORA)』と名付けられた。以上のようにフランケンベルクは伝えている⁽¹⁾。

処女作が往々にしてそうであるように、この『黎明』にもある意味では後のペーメの思想のすべてが含まれている。例えば彼の思想の究極概念となる「無底(Ungrund)」という概念もまだそこには見出されないが、それへと展開される萌芽がある⁽²⁾。またその中心主題も、後の彼の著作もつねにその周りを回っている悪と禍の問題である。ここでは、断片的で体系性に欠ける彼の叙述を、彼の後の思想展開をある程度視野に入れて、主に「二つの性質(2 Qualitäten)」「七つの性質(7 Qualitäten)」「神の聖なる戯れ(Gottes heiliges Spiel)」「ルチフェルの墮落(der Fall Lucifers)」等について整理しておきたい。

【註】

- (1) *DE VITA ET SCRIPTIS oder Historischer Bericht Von dem Leben und Schriften Jacob Böhmes*, Abraham von Frankenberg, 1651, Jacob Böhme: Sämtliche Schriften, Fakismile-Neudruck der Ausgabe von 1730 in elf Bänden 1942ff. X, S.6~11. フランケンベルクのペーメに関する報告は客観的とはいいがたいところがあるが、それは後のペーメ研究の原資料となるものであり、ここでは詳しい記述は避けたが、後の研究も参考にして、フランケンベルクの報告で確実と思われる範囲内のものみに言及することに止めた。なお『キリスト教神秘主義著作集第13巻 ヤーコブ・ペーメ』南原実訳、1989年、教文館、311~337頁参照。
- (2) 「神性の深み(die Tiefe der Gottheit)」という表現(例えば、ibid., I, S.73)がこれに相当する。なお、拙論第一章、第五節の註(5)参照。

第一節 二つの性質について

『黎明』では、まず「神」について語り、「神とは何か」を知るためには、「自然のなかの諸力(die Kräfte in der Natur)」を観察しなければならないと述べられている。その観察のなかで取り出されるのが「二つの性質、善き性質と悪しき性質(2 Qualitäten, eine gute und eine böse)」である。この「二つの性質」は、この世界のすべてのもののうちにあたかも一つのもののように存在しており、これがなければすべての生命は存立しえないところのものである。またこのQualitätという言葉は単なる静的な意味のものではなく、すべての物を動かし、湧出させ、あるいは駆り立てるもの(die Beweglichkeit,

Quallen oder Treiben eines Dinges) である。⁽¹⁾

このような意味での「性質」を解明するために、ベーメは「熱(Hitze)」「冷(Kälte)」「苦い性質(bittere Qualität)」「甘い性質(süße Qualität)」「酸っぱい性質(saure Qualität)」「渋い性質(herbe Qualität)」等を挙げている。⁽²⁾。すべてのものは、これらの諸性質から造られ、そこに由来し、またその力から生き、湧出している。しかしそもそも、それらの諸性質はそれぞれ「二重の源泉(zweifache Quelle)」、つまり「柔和さ(Sanftmuth)」と「憤激性(Grimmigkeit)」すなわち「生と死」、「善と悪」という「二重の源泉」をもっている。⁽³⁾。すべてのものは、この「二重の源泉」から湧出し、駆り立てられ、動き、生長するのである。

例えば「熱」についてはベーメは次のように分析している。「熱」は、そのなかへ入ってくるすべてのものを燃やし、焼き尽くし、滅ぼす。それは「熱」がそれ自身のうちにもつ「憤激性」の働きである。しかしまた「熱」は、すべてのものを照らし出し、冷たい湿った暗いものを暖める。それは「熱」の発する「光」の働きである。この「光と憤激性」とは二つの対立する働きをもつものとして相争っているが、それは「熱」の「二つの相(2 Species)」として本来一つのものである。他の諸性質もこれと同様である。⁽⁴⁾

この「熱」と同じようにベーメは諸性質の分析を通して、それらの根源的原動力になっている「二つの性質」を抽出している。この「二つの性質」は、「この世界のすべての被造物のうちに善悪の意志および源泉がある」⁽⁵⁾とされているように、ベーメの世界理解の根本原理である。しかし問題はその善悪の対立の起源にある。ベーメは、一方では「全自然は神の身体(der Leib Gottes)である」⁽⁶⁾と語り、「自然のうちに探究でき、万物のうちに存在するすべての力は神から発している」⁽⁷⁾と語りつつ、他方では「それゆえに、神のうちに善と悪とが湧出し、存在すると考えてはならない」と言う。そして「そもそも万物は神に由来するのであるから、当然悪も神から由来しなければならない」のではないのかという問いに対して、ベーメは次のような「胆汁(Galle)」の譬えを提出している⁽⁸⁾。人間は身体の中に「胆汁」をもっている。それは毒ではあるが、それなしに人間は生きることはいできない。それは生命の喜びにつながるものであると同時に、極度に増えると生命の危険にもつながるものでもある。同じように神のうちにも「苦い性質」がある。しかしそれは人間のように「胆汁」があるような仕方ではない。神はすべてを喜びに満ちたものにする。神のうちではそれは「喜びの源泉(Freuden=Quell)」である⁽⁹⁾。それではそ

もそも「神とは何か」「神の本質のうちでは一切はいかなる状態にあるのか」⁹⁹。この問題をさらに遡及するのが、ペーメ場合もやはりキリスト教の伝統的な三一神論すなわち父・子・聖霊の問題である。

【註】

- (1) Jacob Böhme, *Sämtliche Schriften, Faksimile-Neudruck der Ausgabe von 1730 in elf Bänden 1942ff.* I, S.24 (1の2,3)。このQualitätという言葉については、「三つの原理について」において次のように述べられている。「ところで、闇の不安な心情のうちに言い表わすことができない原質(Quall)がある。そこから、すなわち一つの源泉(Quell)における多くの苦悶(Qual)から、性質(Qualität)という名前が生じた。」(ibid., II, S.114 (10の42))
- (2) ibid., S.25~29 (1の4から24)。これらの自然の諸力の観察から取り出される諸性質から、神のうちなる「七つの性質」が構想される。
- (3) ibid., S.30 (2の2から4)
- (4) ibid., S.25~26 (1の5、7、11)
- (5) ibid., S.30 (2の4)
- (6) ibid., S.32~33 (2の16)
- (7) ibid., S.36 (2の35)
- (8) ibid., S.36 (2の37)
- (9) ibid., S.37 (2の40)
- (10) ibid., S.38 (2の45)

第二節 父・子・聖霊

父なる神について、ペーメは『エゼキエル書』を引き合いに出し、それを「天の円球 (die runde Kugel des Himmels)」に譬えている¹⁰⁰。「というのは、父のうちすべての力は互いに一つの力のように存在し、すべての力は父のうちでは探究しがたい光と明るさのうちにあるからである」。この父なる神は全知全能であり、自己のうちでは柔和で慈悲深く喜びに満ちており、否それどころか「喜びそのもの (Freude selber)」である。天使たちも、この父の力のなかでは全く柔和に喜びに満ち溢れて生き、つねにその力のなかで歌を歌っている。¹⁰¹

子なる神は父なる神と別の神ではない。子は父の核心であり、その子から

「永遠の天上の喜び (die ewige himmlische Freude)」が湧き出る。この喜びについて、ペーメはパウロの『コリント人への第一の手紙』を引用し、「いかなる眼も見ず、いかなる耳も聞かなかった、そしていかなる人間の心にも決して思い浮かばなかった喜び」であると記している。またペーメは、この子なる神を太陽に譬えている。ちょうど太陽が星と地の只中に存し、あらゆる力を照らし出し、あらゆる力の核心であり、この世のあらゆる喜びであるように、父のうちなる神の子は父の核心であり、その力は父のあらゆる力のうちで湧出する喜びである。⁽³⁾

聖霊は父と子から発し、「聖なる湧き立つ喜びの源泉 (der heilige wallende Freuden=Quell)」であり、「愛らしく柔和で静かな騒めき」である。ペーメはまたこの聖霊を次のような比喻によって示している。多くのさまざまな、名状しがたく数えきれない星々、それは父を意味する。その星々からその核心である太陽が生成した。それが父の子を意味する。さてこの星と太陽から、三つの元素、すなわち火、空気、水が生成した。この三つの元素はそれぞれ三つの運動あるいは「働き (Qualificirung)」をもつが、「体 (Corpus)」は一つである。その運動と働きのなかで、この世のあらゆる被造物の生命と精神とは存立する。これとちょうど同じように、聖霊も父と子から発し、全き父のうちで湧き立ち、あらゆる力の生命であり精神である。⁽⁴⁾

神は以上のような父・子・聖霊として、すなわち三にしてしかも一である。このように喜びに湧き立つ三にして一なる神の根源態をさらに神のうちに遡及して考究するのが「七つの性質」である。

【註】

- (1) *ibid.*, S.40 (3の10). ペーメにおいては「円球」あるいは「輪(Rad)」は「完結性」あるいは「完全性」の象徴である。
- (2) *ibid.*, S.41 (3の10から12)
- (3) *ibid.*, S.42~43 (3の15、20)
- (4) *ibid.*, S.45~46 (3の24、27、28)

第三節 七つの性質と神の聖なる遊戯

さて第一に「神の力」のなかには①「洗い性質」が隠れている。これは「鋭さ(Schärfe)」や「結集(Zusammenziehung)」を意味し、「堅さ(Härtigkeit)」

や「冷たさ(Kalte)」を産む⁽¹⁾。第二の性質は②「甘い性質」である⁽²⁾。この性質は、ちょうど渋いりんごが甘くなるように「渋い性質」を鎮めて愛すべき穏やかなものとする。第三の性質は③「苦い性質」である⁽³⁾。この性質は「渋い性質」と「甘い性質」とを貫き制する。またこの「苦い性質」には、それによって生命が動き出す運動性の起源がある。第四の性質は④「熱」である⁽⁴⁾。この性質が「生命の真の始源」であり、これによって生命が点火される(die Anzündung des Lebens)。第五の性質は⑤「愛(Liebe)」である⁽⁵⁾。それは恵み深く穏和で喜びに満ちた性質であり、この性質によってこれまでの四つの性質は調和させられる。第六の性質は⑥「響きあるいは音(Schall oder Ton)」である⁽⁶⁾。すべてのものはここにおいて鳴り響き、そこから言葉やすべてのものの区別が生じる。第七の性質は⑦「体(Corpus)」である⁽⁷⁾。これは他の六つの性質から生まれる。ここですべてのものは形成され、またすべての美と喜びが生じる。もしこの「体」がなければ、天使も人間もなく、神はただ探究しえない力からのみ成るものであったろう。

さて以上の「七種の性質(siebenerley Qualitäten)」はお互いのうちで生まれた。あるものはつねに他のものを産み、いずれのものも最初のものでも最後のものでもない。というのは、最初のもものが第二、第三、第四と遂には最後のものを産むときに、最後のものもまた最初のを産むからである。あるものが第一、第二等々と呼ばれるのは、被造物の形成、組成においてである。すべて「七つの性質」は「等しく永遠(gleich=ewig)」であり、そのいずれも初まりも終わりももたない。⁽⁸⁾

またベーメは次のようにも述べている。「神性(Gottheit)」は静止していない。それは絶え間なく働き、「愛すべき格闘、動きあるいは闘争」として沸き起こっている。それはちょうど大きな愛のなかで互いに戯れ(spielen)、互いに助けあい苦勞しあう二人のようなものである。それはまた、七人の人間が「朗らかな嬉戯(ein freundliches Freuden=Spiel)」を始めることに譬えられる。一人の者が他の者に勝てば、第三の者が負けた者を援けに現われる。かくして彼らのあいだには「愛すべき朗らかな遊び(eine liebliche freundliche Kurtzweil)」が成立する。これは彼らがすべて互いに「一つの愛の意志(ein Liebewille)」をもち、しかも互いに「遊びあるいは愛(Kurtzweil oder Liebe)」において争うからである⁽⁹⁾。これをベーメは「愛の戯れ(Liebenspiel)」⁽¹⁰⁾あるいは「神の聖なる戯れ(ein heiliges Spiel Gottes)」⁽¹¹⁾と呼んでいる。

以上のようにすべてのものは神うちの「戯れ」であった。それではなにゆえ、

この世は悪と禍に満ちた世界となったのか。この点をさらに解明するために繰り返しペーメにおいて論述されるのがルチフェルの墮落の問題である。

【註】

- (1) *ibid.*, S.85 (8の15から20)
- (2) *ibid.*, S.86~87 (8の21から25)
- (3) *ibid.*, S.87~89 (8の26から32)
- (4) *ibid.*, S.89~100 (8の33から91)
- (5) *ibid.*, S.100~101 (8の92から98)
- (6) *ibid.*, S.114~115 (10の1から12)
- (7) *ibid.*, S.128 (11の1)
- (8) *ibid.*, S.128~129 (10の2から3)
- (9) *ibid.*, S.138 (11の49から50)
- (10) *ibid.*, S.155 (12の57)
- (11) *ibid.*, S.180 (13の85)

第四節 ルチフェルの墮落

さてルチフェルは、かつて上述のような「神の聖なる戯れ」のなかでその喜びと栄光を増すために造られた王天使の一人であった。そのなかでも、なにゆえルチフェルが離反し追放される者となったのか。

三大天使の創造についてペーメは次のように述べている。「深み (Tiefe)」には「七つの性質」があり、そこでそれらの性質すべてが動き、光もそのなかで動いていた⁽¹⁾。そこから神はその三一性に従い三つの王国を造った。その三つの王国の君主が、それぞれミカエル、ルチフェル、ウリエルである。ミカエルは神の強さあるいは力を意味する。彼は「七つの性質」から、その「核心」として結成された。つまり父なる神の性質をもつものとして造られた。ただしミカエルは被造物であり、始まりをもっている。次にルチフェルは、子としての神の性質に応じて造られた。彼は子として愛において神に結合し、その「核心」もあたかも彼が神自身であるかのように光の中心に立っていた。そして彼の美しさはすべてのものにまさっていた。またウリエルは聖霊の性質に応じて造られた。彼は光あるいは「閃光(Blitze)」から、その名を得ている。聖霊が光から出て、すべてのものを形造り支配するように、彼の力も同様である。⁽²⁾

ルチフェルとは、その墮落においてその本当の名前を失ってしまった者、「神の光からの追放者(ein Verstossener aus dem Lichte Gottes)」であるが⁽¹⁾、三大天使のなかでルチフェルがなにゆえそのような者となったのか。上述したように、天使たちは本来神の喜びを増すために、神のすべての力から造られた被造物であった。その造られたという意味では天使たちは始まりと終わりをもち、神とは異なるが、そのうちには「全き神性」におけると同じすべての性質および力がある。ここにルチフェルの墮落・離反の可能性がある。

ベームはこの神と天使との関係を、母と子との関係に譬えている。母が子種を自分のなかにもっている間は、それは母のものである。しかしそれが子となるときは、子はもはや母のものでなく、子自身のものである。そしてたとえ子が母なくしては生きえず、その母の家におり、彼女に養われていようと、その肉体と精神とは子自身のものである。天使もこれと同じである。⁽²⁾

またベームは、ルチフェルの追放を次のような譬えで説明している。母は子のものでないように母の食物も子のものではなく、母が子を産んだその愛によって子に与えるものである。母はもし子が母に従わなければ、子を家から突き出し、その食物を取り上げることができる。これがルチフェルの王国に起こったことである。⁽³⁾

天使たちは「無底的永遠 (die ungründliche Ewigkeit)」のうちで、神の「喜びと栄誉と栄光」のために造られた「小さな神々(kleine Götter)」であった⁽⁴⁾。つまり天使たちは、神の栄光を高めるために、いわば神の対極に立つものとして創造された永遠なる被造物であった。それゆえまた、そのうちには神から離反する危険性も秘められていた。そして、その最極端に立っていたのが王天使ルチフェルであった。というのは、ルチフェルは天使たちのなかでも「最も美しく最も力強い体(der allerschönste und kräftigste Leib)」⁽⁵⁾をもち、「最も美しい君主 (der schönste Fürst)」⁽⁶⁾であったからである。そして「彼は最も美しい者であったから、また最も力強い者であろうとした」⁽⁷⁾、すなわち「神以上となろうとした」⁽⁸⁾のである。その時ルチフェルは「神に対する神、強者に対する強者」であった⁽⁹⁾。この「驕慢(Hoffart)」によってルチフェルは「永遠の間」のなかへ追放されたのである。

【註】

(1) *ibid.*, S.146 (12の3)

(2) *ibid.*, S.159~163 (12の86から111)

- (3) *ibid.*, S.161 (12の100)
- (4) *ibid.*, S.58 (4の34から35)
- (5) *ibid.*, S.58 (4の36から37)
- (6) *ibid.*, S.75 (7の18)
- (7) *ibid.*, S.171 (13の31)
- (8) *ibid.*, S.181 (13の90)
- (9) *ibid.*, S.209 (15の9)
- (10) *ibid.*, S.234 (16の79)
- (11) *ibid.*, S.200 (14の72)

第五節 世界の創造

さて『黎明』では、世界の創造はルチフェルの墮落・追放に続いて起こったものとされている。上述したように、神のうちではすべては「楽しい愛の戯れ」であり、天使の創造もその喜びを増幅するものにすぎなかった。しかし、ルチフェルの「驕慢」のゆえに「七つの性質」は変質した。「渋い性質」は「冷たく」なり、「甘い性質」は「酸っぱく」なり、「苦い性質」は「憤り、突き刺し、荒れ狂う」ものとなった。また「熱」は「地獄の火」となり、「愛」は「暴君」のように振る舞うものとなり、かくして「六つの性質」の「体」も完全に変質してしまった。それゆえ「もう一つの創造(eine andere Schöpfung)」が続いて起こらなければならなかった。それがこの世界の創造である⁽¹¹⁾。例えば次のように述べている。

「ルチフェルがその驕りによって七つの本源=霊に点火し、すべては燃えるものとなった。渋い性質は非常に堅くなって石を産み、非常に冷たくなって甘い源水を氷とした。そして甘い源水は濃厚に、臭くなった。苦い性質は烈しく荒れ狂い、引き裂き、暴れるものとなり、そこから毒が噴出した。そして火あるいは熱は烈しく燃えるもの、焼き尽くすものとなり、きわめて悪しき気質あるいは混同が生じた。」⁽¹²⁾

「さてこのようにして主ルチフェルは、彼の主の場所すなわち王座から追い出された。その王座を彼は、いま創造された天があるところにもっていた。そこですぐにこの世界の創造がこれに続いた。点火された七つの本源=霊において影響された堅い粗雑な質料も、一緒に追い出された。ここから地や石が生成し、次いで、すべての被造物が七つの神の霊の点火されたサリテルから生じた。」

(傍点筆者)⁽³⁾

このように喜び溢れる「神の聖なる戯れ」の世界から、悪と禍に満ちたこの世界が出現したそもその原因にはルチフェルの墮落の問題がある。ベーメの場合、この問題はさらにアダムや人間の魂の墮落の問題に重ねられる。つまり、ルチフェルの墮落の問題は、そのままアダムや人間の魂の墮落の問題に繋がる。しかし、この問題は逆に「人間の聖なる魂 (die heilige Seele des Menschen)」⁽⁴⁾ が、そもそも「神性の深み (die Tiefe der Gottheit)」⁽⁵⁾ に由来するものとして、神のごとき自由を獲得する可能性を示唆している。この点は、この『黎明』では十分に展開されているとは言えない。

【註】

(1) *ibid.*, S.200~201 (14の73)

(2) *ibid.*, S.112 (9の43)

(3) *ibid.*, S.112 (9の44)

(4) *ibid.*, S.62 (5の19)

(5) *ibid.*, S.73 (7の6), S.74 (7の11). そこからそもそも神そのものが誕生する「神性の深み」は「無底的 (ungründlich)」であり、そこに由来する「魂」はいかなるものにも依拠しない自由を獲得するものとなる。

以上『黎明』に現れた限りでのベーメの初期思想について論述した。これに続く著作への展望をもって、再度整理すると次のようになろう。

一、「二つの性質」はベーメの神・世界・人間の理解の基本原理となるものである。「憤激性と柔和さ」、「闇と光」等の自然を動かす根源的原動力は、そのまま人間あるいは神そのものを動かす基本原理であり、ベーメ思想の力動性を表現するものである。ただここで注意すべきは、この「二つの性質」の抽出は、当初自然の諸力の観察のなかから取り出されているということである。これは後の神智学的展開とは異なる手法と言わざるをえない。

二、聖なる三一性の思想は、ここでは充分展開されているとは言えない。三一性の思想についてのベーメの理解は、次の著作の『三つの原理について』において詳論される。ただここで注目しておきたいことは、すでにこの『黎明』に現われているように、神はその三にして一なる「根源態」にあって、喜びに沸き立っていたと述べられている点である。

三、神のうちなる「七つの性質」は「等しく永遠」であり、それらの円環

的交互関係のなかで成立する「動き」は、ベームによって「神の聖なる戯れ」と呼ばれる。また「七つの性質」はまさしく彼の思想の源泉であり、「性質 (Qualität)」とはそこから世界が生まれる「苦悶 (Qual)」であり、「源泉 (Quelle)」である。

四、喜びに沸き立つ神の「嬉戯」の世界から、いかにして悪と禍に満ちたこの世界が生じたのか。この問いに答えるものが、ルチフェルの墮落である。「神性の深み」から由来する天使には、いかなるものにも依拠しない自由が与えられているが、またそこに墮落の可能性も含まれている。ベームは悪と禍の起源に「驕慢」を見ている。

五、「黎明」においては、この世界の創造はルチフェルの墮落に続くものとして展開される。ルチフェルの墮落によって変質した「七つの性質」から、この世界が創造される。それは神がこの世界において再度顕らわにされるためである。そこではルチフェルの問題はアダムさらには人間の魂の問題に重ねられる。そして「神性の深み」は後には「無底」へと深化熟成され、ベーム思想の究極概念となる。

第二章 「三つの原理について」

さて【黎明】が偶然の機会を得て世に出たとき、当時のゲルリッツの首席牧師グレゴリウム・リヒターはその異端性を激しく攻撃した。そのため市の参事会もベームを召喚し、【黎明】を没収し、以後の彼の執筆を禁止した。その禁を守りベームは沈黙をしていた。しかしなおリヒターは説教壇より、その攻撃をやめなかった。また折りから、いわゆる三十年戦争が初まった。このような状況のなかで、ベームは7年間の禁を破り、再執筆を開始した。⁽¹⁾【黎明】の不明を明らかにする意図があったと思われる。こうして書かれたのがこの【三つの原理について】である。

【註】

(1) *ibid.*, X, S.11~12

第一節 自分自身を学び知ること

【三つの原理について】は次のような問題提起で始まっている。この世にお

いて人間にとってなによりも有益で必要なことは、「自分自身を学び知ること」である。それは、①人間とは何か、②どこから来たのか、③何のために創造されたのか、④その「職務 (Amt)」は何かを学び知ることである。そしてこの真剣な観察のなかで次のことが見出される。それは、①すべてが神から由来すること、②人間が「最も高貴な被造物」であること、③いかに神が人間に心を向けられているかということである。⁽¹⁾

またさらに次のように述べている。神は人間に「知性と最高の感性」を与えられた。それによって、人間は彼の創造主である神を認識できる。すなわち、神とは何か、いかにあり、だれであり、どこにいるのか。またどこから人間は造られ、由来しているのか。そして、人間はいかに「神の像」であるのか等が認識される。ただしここには「神的な知恵」そのものが働いている。またそこには「人間に対する神の愛」が認められる。この「知恵」と「愛」のなかで、人間はその創造主を知り、その「職務」を自覚するのである。⁽²⁾ この点はまた次のように述べられている。人間はその「無知」を言い訳にできない。「神の意志はわれわれの心情のうちに記されている」(傍点筆者)。それゆえ、われわれは自分が何をなすべきかをよく知っているのである。ただし悪魔がこの世にあって、われわれが神から離反するように日々誘惑している。それゆえにこそまた、われわれは「自分自身を学び知ること」が最も必要なのである。すべてのもののうちには「反意志(Widerwille)」あるいは「毒と邪悪」がある。しかしそれはかくあらねばならない。というのは、さもなければ「生命も動きもなく」、すべては「無 (Nichts)」であるだろう。一切は神から由来している。神自身がこのように創造したのである。悪は「形成」と「動き」に属し、善は愛へ、「苛酷さ」と「反意志」は「喜び」に属する。被造物が神の光のうちにあるかぎり、怒りや「反意志」は「高揚する永遠の喜び」を造る。しかし神の光が消滅するならば、それは永遠に苦痛に満ちた地獄の火を造る。このようにわれわれは、この世にあって「きわめて大きな危険」のうちにある。それゆえ「自らを正しく学ぶこと」より有益なことはないのである。⁽³⁾

序言ではおよそ以上のように述べられている。「三つの原理」とは、以上のような人間の出处およびそのあるべき姿をより詳細に解明するものである。

【註】

(1) *ibid.*, II, S. 1~2 (Vorrede, 1)

(2) *ibid.*, II, S. 2 (V., 3, 4)

第二節 聖なる三一性

ベーメの言う「三つの原理」とは何か。それは本来キリスト教の伝統的な聖なる三一性の概念に由来するものである。まず次のように述べられている⁽¹⁾。

①、父、すなわち万物の創造主と呼ばれる神が存在する。この父なる神は全能であり、「一切における一切」である。一切は彼のものであり、彼のうちにあり、彼から由来し、永遠に彼のうちに留まる。②、神は永遠からその子を産む。子は父の「核心、光、愛」である。父と子は二つのものではなく、一つのものである。③、聖霊は父と子から発する。そしてこの父と子と聖霊のうちには一つの本質がある。さらにまたこの三一性の思想は次のように述べられている⁽²⁾。

①、父は「一切の存在の最も根源的な存在」である。しかし父は子の誕生がなければ「暗い谷」であろう。②、子は父の「核心、愛、光、美、柔和な慰め」である。この子の誕生において「もう一つの原理」が開かれる。それは怒り憤る父をなだめ、穏和な慈悲深いものにする。③、聖霊は父と子から発する。父のうちで、その「核心」であり「光」である子が生まれると、そこに「きわめて慈愛深く芳香を発する美味の霊」が立ち現われる。これが、「根源態」にあつては「洪い母」のうちの「苦い棘」であった霊である。

以上のような形でベーメは、伝統的なキリスト教の三一性の概念に読み込みを加えている。ここでは後の「三つの原理」に関する彼の展開も視野に入れて、特に次の言葉に注目したい。それは次のような言葉である。「闇の原質が第一の原理であり、光の力が第二の原理であり、光の力による闇からの産出が第三の原理である」⁽³⁾。このようにベーメは「第一の原理」を「闇の原質(die Quall der Finsterniß)」と呼び、また別の箇所では「第二の原理」は「光の原質(die Quall des Lichtes)」、「第三の原理」は「この世界の原質(die Quall dieser Welt)」と呼んでいる⁽⁴⁾。その発想の起源は別にして、ここではこの1619年の『三つの原理について』に現われている限りでの意味を差し当り明らかにしておきたい。というのは、この「三つの原理」はベーメ思想の展開を考えるうえで極めて重要な役割を担っており、その萌芽的発想がこの著作のうちにあると考えられるからである。ただし、その内容は決して鮮明とは言えない。というのはその内容は、さらに充分消化されているとは言えない錬金術的概念

が導入されて、ベーメの意に反してむしろ不透明になっていると言わざるをえないからである。その点を考慮しつつ、ここでできるだけその主張を整理しておきたい。

【註】

- (1) II, S.41~42 (4の57)
- (2) II, S.42 (4の58)
- (3) II, S.68~69 (7の24)
- (4) II, S.105 (10の11)

第三節 第一の原理

「第一の原理」としての「闇の原質」とは「神の生誕の深み (die Tiefe der Geburt Gottes)」⁽¹⁾を指し示す。その「深み」は「無底的(ungründlich)」であり⁽²⁾、そこにおいて神は神自身を産出する。またその神の自己内産出のうちに「生命とすべての動きの起源」⁽³⁾がある。そのような意味での「闇の原質」を形成するものとして、ベーメは「渋味」「苦味」「火」等の【黎明】ですでに現われた「七つの性質」や、あるいはそれにさらに「硫黄、水銀、塩(Sulphur, Mercurius und Sal)」という錬金術の概念を導入する。

さてまず「硫黄、水銀、塩」という錬金術の根本物質は、字義通りの物質を指すものではなく、霊的なものと物質的なものとの中間的性質のものであり、その両者を媒介するものと考えられる。ベーメは、これをそこから万物が生成した三つのものであると言ひ、それと「渋味」「苦味」「火」とを絡めて次のように述べている。

①、Sul(「硫黄(Sul-phur)」の Sul)は、「魂」あるいは「立ち現われた霊」である。またPhur(Sulphurの phur)は、「第一質料(Prima materia)」であり、そこから「霊」が生まれる。次に②、「水銀」は自己のうちに「四種の形態」、すなわち「渋味」「苦味」「火」「水」をもつ。そして最後に③、「塩」はこの四つのもので産む子であり、「把握の原因」である。⁽⁴⁾

このような錬金術に関するベーメの理解はどこから得られたものかは明確ではないが、この「硫黄、水銀、塩」は【三つの原理について】以降頻出する。この錬金術の概念は、「渋味」「苦味」「火」等の「性質」以上に、世界の起源に関わるベーメの主張の核心に属するものである。

さて次に「渋味」「苦味」「火」については次のように述べている。神は「すべての本質の本質 [すべての存在の存在] (das Wesen aller Wesen)」である。すべては神から創造され、生まれている。ただし、神はそこから世界を創造した「質料 (Materia)」として、自己自身の「本質」以外の何ももたない。神はそもそも把握されず、始まりも終わりももたない「霊 (Geist)」である。それは立ち現われ、沸き立ち、動き、絶えず自己自身を産むこと以外の何も為さない。

この神の霊的自己内産出のうちで最初に形を得るものが、「渋味」「苦味」「火」である。この三種の形態はいずれも第一、第二、第三のものではなく、三つすべてが一つのものに過ぎず、また各々のものがそれぞれ第二、第三のものを産むという関係にある。「根原(Urkund)」にあっては、すべては一つである。その一つのものが神の本質から、その三一性にしたがって生成する。その最初の動きを説明するものが、この「渋味」「苦味」「火」であり、それが「第一の原理」と呼ばれるものを形成するものである。⁽⁵⁾

さて「渋味」「苦味」「火」によって「第一の原理」が組成されるのであるが、その最元初の動きは「渋味」の特性である「収縮作用」によって始まる。次のように述べられている。「渋味」は「万物の母胎にして原因」である。それは「暗く、冷たく、無のようである」。「永遠なる神性」はこの「渋味」において「自己を映す」。そこで「暗い渋味」は「神的力量」を「渴望」するものとなり、自己へ「収縮」する。この「渋味」のうちにはまだ「生命」も「理知」もないが、そこから「あるもの」が生じる起源がある。⁽⁶⁾

さてこのように「渋味」の収縮作用によってすべてが始まるのであるが、それは「光への大きな憧れ」として「激しい飢え」でもある。この「飢え」あるいは「牽引(Anziehen)」が、「苦味」「苦痛」を産み出す。ただし、それは満たされ和らげられることは決してない。「飢え」は絶えずその「苦味」「苦痛」から逃げ出さんとして、決してそこから逃げ出すことができない。そこでその動きは「回転する輪 (ein drehend Rad)」のようになり、そこに「不安」が醸成される⁽⁷⁾。例えば次のように述べられている。

「先に述べたように、第一の原理のうちに渋味、苦味、火がある。ただし、それらは三つのものではなく、一つのものであり、一つのものが他のものを産んでいる。渋味は第一の父であり、それは峻厳で、きわめて鋭く自己牽引するものである。この牽引が棘、苦味であり、それは渋味を耐えられず、死のうちに捕えられていようとはしない。それは憤るものとして、突き刺し立ち上がる。

しかし、それは自分の居場所から出られない。そこに安息を見出せない恐ろしい不安が生じる。生誕は回転する輪に等しい……」（傍点筆者）⁽⁸⁾ この「回転する輪」のような動きのなかで「不安」はますます高まるが、その只中において「火の閃光(der Feuer=Blitz)」が走る。その「驚愕 (Schrack)」の瞬間、暗く硬かった「原質」は光輝く柔和なものとなる⁽⁹⁾。ただし、そこにはすでに「第二の原理」の働きが届いている。

【註】

- (1) ibid., S.16 (2の8)
- (2) ibid., S.32 (4の17)
- (3) ibid., S.9 (1の2)
- (4) ibid., S.11 (1の7)
- (5) ibid., S.9 (1の3、4)
- (6) ibid., S.65 (7の11)
- (7) ibid., S.11~12 (1の11)、S.16 (2の8)、S.65 (7の12)
- (8) ibid., S.40 (4の50)
- (9) ibid., S.12 (1の12)、S.40 (4の50)

第四節 第二の原理

われわれは、「第一の原理」のうちに「父なる神の全き深み(die ganze Tiefe Gottes des Vaters)」を見た。それは「神の最も根源的な自然の源泉」であり、そこから魂も悪魔も由来している。しかし「聖なる神の生誕」のうちには「もう一つの原理」がある。⁽¹⁾それが「光の原質」と呼ばれる「第二の原理」である。上述したように「激しい牽引」のうちで動く「第一の原理」のなかで「回転する輪」のような動きが生じていた。その動きのなかで「闇」と「大きな不安」が醸成されていた。この「闇」に「光」を与え、「不安」を「喜び」に変えるのが、「第二の原理」である。この点は、ベーメの後の著作で表現されるほど明瞭ではないが、次のように述べられている。

「根源にある渋い原質が母であり、そこから他の五つの原質、すなわち苦味、火、愛、音、水が生まれた。さて、それらはその母の生誕の肢体であり、これらがなければ母も不安な暗い谷に他ならないであろう。そこには動きはなく、また光も生命もないであろう。ところが、生命が光の点火によって母のうちで

生まれると、母はそれ自身の性質のうちで楽しみ、それ自身の洗い性質のうちで再び誕生のために働く。そして、それ自身の性質のうちで生命が立ち現われる。」(傍点筆者)⁽²⁾

「大きな不安の原質は、渋味のうちで光以前の根源態のなかにあった。その渋味から苦い棘が生まれていた。いまや、その不安の原質は、水の霊に由来する光のなかの愛の柔らかな原質において変えられた。そして、苦味あるいは棘から喜びの原質と上昇が光のうちで生成した。」(傍点筆者)⁽³⁾

さて永遠の世界におけるこの「第二の原理」の出現によって生起するのがパラダイスである。またさらに、そのパラダイスにおける「喜び」を増幅させるために、神によって創造されるのが天使である。次のように述べられている。

「第一と第二の原理とから沸き立ち発出する霊が、すべてを構成し確定する。それは生誕全体のなかにおいて、ちょうど一つの意志における生長あるいは多様化である。生誕はここで第七の形態を獲得する。すなわち、それは一つの愛の本質における多様化である。この第七の形態のうちにパラダイス、すなわち神の国がある。」⁽⁴⁾

「天使たちはみな第一の原理において造られ、沸き立つ霊によって、まさに天使の霊的あり方へ形造られ、具身化された。彼らは神の光に照らされ、パラダイスの喜びを増幅させるべきであり、永遠にそこに留まるべきであった。しかし彼らは、彼らがそこに永遠に留まるべきであったのなら、解きがたい紐帯から形像化されねばならなかった。すなわち、解きがたい紐帯である第一の原理から形像化されねばならなかった。そして、彼らは神の核心へ眼を向け、神の言葉を食べるべきであった。この食事は彼らを神聖に保ち、彼らの姿を明るく輝くものとしたであろう。それはちょうど、神の核心が、第二の原理の出現において(第一の原理である)父を照らし、そこに神的力量、パラダイス、天国が立ち現われるようにである。」(傍点筆者)⁽⁵⁾

このように「第二の原理」の出現によってパラダイスが生起した。また神は天使たちをそのパラダイスにおける喜びを増幅させるために創造した。ペーメは、この永遠なる世界に生起する動きを、まさに「聖なる戯れ(ein heiliges Spiel)」あるいは「永遠の喜びに溢れる愛の戯れ(ein ewiges, freudenreiches Liebe= Spiel)」と呼ぶのである。次のように述べている。

「天使の行為はすべて天上の喜びの増幅(eine Vermehrung der himmlischen Freude)であり、神の核心の喜びであり、パラダイスにおける聖なる戯れであり、永遠なる父の意志である。神は天使たちを、自分が顕わになり、自分の被

造物たちのうちで喜び、そして自分のうちの被造物たちを楽しむために創造した。かくして多様化の中心すなわち永遠なる自然の中心において、つまり解くことのできない永遠の紐帯において、永遠の喜びに溢れる愛の戯れがあらんがために、神は天使たちを創造したのである。」(傍点筆者)⁽⁶⁾

【註】

- (1) ibid., S.14 (2の1、2、3、4)
- (2) ibid., S.22 (3の11)
- (3) ibid., S.23 (3の12)
- (4) ibid., S.41 (4の55)
- (5) ibid., S.44 (4の67)
- (6) ibid., S.44~45 (4の68)

第五節 第三の原理

「闇の原質が第一の原理であり、光の力が第二の原理であり、光の力による闇からの産出が第三の原理である」と述べられていたように、「第三の原理」の出現の根本に働くものはこの「光の力」と呼ばれている「神的力」である。次のように述べられている。

「かくして本来、いかに神の光が万物の原因であるかが理解され、ここで三つの原理すべてが理解される。というのは、神的力と光がないならば、暗い永遠のうちにはその力と光への切望もなく、(永遠の母である) 深い渴望もすべて無であるだろう。それから、いかに神的力が万物のうちに現われるかが理解される。しかし物そのものではなく、神の霊が第二の原理のうちにある。物は、切望する意志から生じた神の霊の輝きである。ところで、父のうちなる神の核心が最初の意志であり、父は子への最初の渴望であり、子は父の力にして光であって、これによって永遠なる自然はつねに熱望されている。かくして神の核心の力によって、永遠の暗い母胎のなかで第三の原理が生まれる。というのは、このようにして神は顕わであり、さもなければ神性は永遠に隠れたままであろう。」(傍点筆者)⁽⁷⁾

また次のように述べられている。

「さて、永遠の光、ならびに光の力、あるいは天上のパラダイスが永遠の闇のうちに漂っている。闇は光を把握できない。というのは、それらは二つの異

なった原理であり、それで闇は光を切望するのである。これが、霊がそこに自分を映し、神的力量がそこで顕わである原因である。闇は神的力量および光を把握していないのであるから、闇はこの力と光に対して大いなる願望をもって立ち上がり、ついには神の光の輝きによって自分のうちで火の根基に点火するのである。そこに第三の原理が現われる。それは第一の原理から、すなわち闇の母胎から、神的力量の反映によって生じるのである。」(傍点筆者)⁽²⁾

さて「第三の原理」は上述したように「この世界の原質」であり、それは「この世界の始まりと誕生」を意味する⁽³⁾。「神は質料的世界 (materialische Welt)によって顕わとならんがために第三の原理を産んだ」(傍点筆者)⁽⁴⁾のである。それゆえ、またわれわれは「質料的世界」においてパラダイスの「似姿 (Gleichniß)」を見る⁽⁵⁾のである。しかし、そのような世界がなにゆえ禍と悪に満ちた世界となったのか。ベーメの関心はここへ集中する。そして、先に述べた『黎明』においてもそうであったが、この問題の遡源においてベーメによって繰り返し言及されるのが、「ルチフェルの墮落」である。ここでは、それについて『三つの原理について』において展開されているものを整理しておきたい。

【註】

- (1) ibid., S.66 (7の14)
- (2) ibid., S.69~70 (7の29)
- (3) ibid., S.50 (5の8)
- (4) ibid., S.52 (5の16)
- (5) ibid., S.53 (5の18)

第六節 ルチフェルの墮落

さてルチフェルはかつて王天使の一人であった。上述したように神はそもそも天使たちを「永遠なる、喜び溢れる愛の戯れ」のために創造した。そのルチフェルがなにゆえ墮落したのか。先に引用した天使の創造に続いてベーメは次のように述べている。

「この(愛の戯れ)をルチフェル(このように呼ばれるのは、その光を消失し、その玉座を追われたからであり、彼は多くの軍勢の君主、王であった。)が自分で破滅させ、悪魔となり、その美しくすばらしい似姿を失った。という

のは、ルチフェルは他の天使たちと同じように、永遠の自然から、永遠の解きたい紐帯から造られ、パラダイスのなかに立っていたからである。またルチフェルは、聖なる神性の生誕、第二の原理である神の核心の生誕、聖霊の確立を感じ見ていたからである。彼の糧が主の言葉からのものであったなら、そこで彼は天使でありつづけたであろう。」⁽¹⁾

「しかし彼は、自分が第一の原理のうちに立つ君主であることを知ったがゆえに、神の核心の生誕とその柔和で愛に溢れる働きを軽蔑した。そして彼は第一の原理におけるきわめて強力で恐るべき主であると誤認して、火の力において働こうとした。神の核心の柔和を軽蔑した彼は、自分の想像をそこへ向けようとはしなかった。それゆえ彼は、主の言葉によって養われることができず、その光は消えてしまった。それゆえ彼はただちにパラダイスにおける嘔吐となり、その玉座から、彼につき従う軍勢とともに吐き出されてしまったのである。」⁽²⁾

神は悪魔を自分から造ったのではない。ただ自分の喜びのために、喜びのうちに生きる天使を造ったのである。しかし、その天使が悪魔となり、神の敵となったのである。ここにこの世の禍や悪の原因である「邪悪への第一の質料 (Prima Materia zur Bosheit)」がある⁽³⁾。また次のように述べられている。「さて神の核心がルチフェルから離れてしまったがゆえに、第二の原理は彼には閉じられてしまった。したがって、彼は神と天国、あらゆるパラダイスの機知、楽しみと喜びを失い、それからまた神の像、聖霊の確証を失った。というのは、彼は自分がそこで天使と神の像となった第二の原理を軽蔑したからである。一切は彼から離れ、彼は暗い谷のうちに残った。彼はその想像力をもはや神のうちへ高められず、永遠なる起源の四つの不安のうちに留まった。」⁽⁴⁾

この世の悪と禍の起源には、このルチフェルの神話に代表されるような「驕慢の意志 (der Wille der Hoffart)」⁽⁵⁾の問題が伏在している。それはまたベーメにおいてはアダムや人間の魂の墮落と重ねられる。つまり彼の場合、ルチフェルの問題は、そのままアダムさらには人間の魂の問題なのである。したがって、ここから人間のあるべき姿が論じられる。次のように述べられている。

「しかし人間は、一つの像、それも神がそのうちに住みたまう神の似姿であるべきであった。ところで神は霊であり、神のうちには三つの原理すべてがある。そして神は、三つの原理すべてを自己においてもつような像を造ろうとした。その像がまさに神の似姿である。」⁽⁶⁾

また次のように述べられている。

「ところで人間は三つの原理すべてをもたねばならなかった。彼は神の似姿

であるべきであった。彼は、(1)闇の原質であり、(2)また光の原質であり、そして(3)この世の原質であるべきであった。しかし彼は三つの原質すべてにおいて生き、働くべきではなかった。そうではなく、一つの原理において、すなわち彼の生命がそこで現われたパラダイスの原質において生き、働くべきであった。」⁽⁷⁾

ここには人間が「三つの原理」すべてをもつことと、そのなかの一つの原理である「光の原質」において生きるべきことが述べられている。すなわち、また次のように述べられている。

「人間はパラダイスのうちに留まり、永遠に動くべきではなかった。というのはパラダイスは神聖であり、人間も神聖であらねばならなかったからであり、神聖性のなかに神的力とパラダイスがあるからである。」⁽⁸⁾

【註】

- (1) *ibid.*, S.45 (4の69)
- (2) *ibid.*, S.45 (4の70)
- (3) *ibid.*, S.10 (1の5)
- (4) *ibid.*, S.45 (4の71)
- (5) *ibid.*, S.46 (4の73)
- (6) *ibid.*, S.104 (10の9)
- (7) *ibid.*, S.105 (10の11)
- (8) *ibid.*, S.105 (10の12)

一、「三つの原理」によるベーメ思想展開の源泉は、その内面的神秘的経験にある。「神の意志はわれわれの心情のうちに記されている」と言う。われわれは、「自己自身を学び知ること」において、その「神の意志」に対する「反意志」「毒」「邪悪」の根源に遡ることができる。というのは、われわれ自身が「大きな危険」のうちに立っているからである。

二、聖なる三一性の思想は、ここではベーメの「三つの原理」によって読み変えられる。「闇の原質が第一の原理であり、光の力が第二の原理であり、光の力による闇からの産出が第三の原理である」と言われている。

三、「第一の原理」としての「闇」は、「神の生誕の深み」を意味する。その「第一の原理」の最原初の動きは、「渋味」の特性である「収縮作用」によって始まる。この作用は「闇」への収縮として、同時に「光」への「激しい飢え」

を産み出す。しかし、その「飢え」は決して満たされることはない。それは「苦痛」であるが、決してそこから逃げ出すことはできない。ここでその動きは「回転する輪」のようになり、「不安」が醸成される。そして、「回転する輪」のような動きのなかで高められた「不安」の只中に突如「閃光」が走り、「驚愕」において「闇の原質」は光り輝く柔和なものとなる。そこにはすでに「第二の原理」の働きが届いている。

四、「光の原質」である「第二の原理」の働きによって、「不安」は「喜び」に変わる。この「第二の原理」によってパラダイスが出現する。天使は、このパラダイスにおける「喜び」を増幅するために創造された永遠の被造物である。そして、そこに生起する動きをペーメは、「聖なる戯れ」あるいは「永遠なる、喜び溢れる愛の戯れ」と呼んでいる。

五、「第三の原理」は「この世界の原質」であるが、それは「光の力」によって「闇」から産み出された「原理」である。神は、この世界において顕わとなるために、この「第三の原理」を産んだ。したがって、この世界はパラダイスの「似姿」であり、この世界に住む人間も「神の似姿」であるはずである。ところが、この世界は悪と禍に満ちている。この問題を遡及するところに出てくるのが、「ルチフェルの墮落」の問題である。

六、ルチフェルはかつて王天使の一人であった。彼は本来「永遠なる、喜び溢れる愛の戯れ」のために創造された。ところが、彼自ら、その「愛の戯れ」を破滅させ、悪魔となった。それは、ルチフェル自身の「驕慢の意志」である。この「ルチフェルの墮落」の問題は、そのまま人間の魂の問題に重ねられる。人間の魂も、本来「三つの原理」すべてを自己のうちにもつ「神の似姿」であるべきであった。そして、「人間はパラダイスのうちに留まり、永遠に動くべきではなかった」と言われている。

(未完)

(教育学部 助教授)